

山田寺金堂式平面建物の 上部構造と柱配置の意味

はじめに 7世紀中頃建立の山田寺金堂（奈良県）の平面はまったく特異である（図20）。これと同じ形式の平面を持つ建物が他に2例確認されている。

この平面形式について、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録『山田寺展』（1981）で解釈が試みられている。「金堂の構造は、身舎の柱と廂の柱を一対一で結び、さらにそれをそのまま放射状に外にのばして丸桁を支えるということが基本」であるとする。また、上野邦一は「隅一組物の建物について」（『建築史学』第8号、建築史学会、1987）のなかでとりあげ、組物形式との関連性を論じている。他の論文でも総じて構造と関連づけて論じられている。

しかし、建築の形態を決める要因は構造だけではない。本稿では、構造に限らずほかの視点にも立って、この特異な平面の解釈を試みる。

平面とその特徴 山田寺金堂と同じ平面をもつ建物には、穴太廃寺金堂（滋賀県）および夏見廃寺金堂（三重県）の都合3棟がある。この三者には以下の特徴がみられる。

- ・山田寺と穴太廃寺の金堂は桁行が約15mで同規模。夏見廃寺金堂は約10mで山田寺等の身舎と同じ。
- ・廂の柱は、桁行は全体を三分割、梁行は二分割した位置にたてる。身舎の平の柱は廂のものに筋を合わせる。その結果、身舎の柱間数が桁行、梁間とも廂のものと同じになる。

規模から推定される上部構造 飛鳥時代金堂の規模は、奈良時代のものよりかなり小さく、かつ近似している。法隆寺金堂、飛鳥寺金堂などは皆ほぼ同じ規模である。山田寺金堂、穴太廃寺金堂も例にもれず同じ規模である。この理由は何であろうか。

法隆寺金堂においては、初重身舎および二重の横材は原則として継手のない一丁材を組み上げている。身舎の桁行寸法は約10mで、この10mという寸法は、古代において通肘木等規格材において使用できる木材の最大長さに近い（拙稿「古代建築における建物規模・構造と部材長」『年報1999-I』）。

つまり、当時の金堂建築は、法隆寺金堂のように、少

なくとも身舎においては継手のない一丁材を組み上げた構造だったのではなかったか。そのため、材料からくる制約により、皆同じ規模になったと考える。山田寺金堂、穴太廃寺金堂は身舎を、夏見廃寺金堂は建物全体を一丁材で組み上げる構造だと推定される。

組物形式 山田寺金堂等の組物を検討する前に、法隆寺金堂の組物の形式、納まりを観察したい。雲肘木など特異な形態が目を引くが、それは別にして、納まり上、後世のものと異なる点がある。後世のものが、力肘木と壁付きの肘木を相欠にして同じ高さで組み合わせるのに対して、法隆寺金堂は力肘木の位置を壁付きのものより高くしている。これは、力のかかる力肘木の断面欠損を極力少なくするための工夫である（図21）。このような納まりにおいて、隅柱位置の組物は物理的に隅行一方向しか出せない。

山田寺金堂等の組物は、柱配置からみて、これまで指摘されているように、法隆寺金堂と同じ形式であったとみてよいであろう。ここで問題となるのは、同じ組物形式でありながら、山田寺金堂等がどうして法隆寺金堂形式より構造的に弱くなる柱配置（特に廂部分は柱の本数が少ない分、柱や桁が受け持つ荷重は大きくなる）を選択したのか、その理由である。

安置仏と建物平面 建物の平面を決定する要素のひとつに構造的な側面がある。また、先ほど述べたように、使用する木材など材料からくる制約もあるであろう。しかし金堂建築においてもっとも重要なものは、安置する仏像の種類、大きさ、配置などであろう。ここで安置仏と建物の関係を探ってみたい。

山田寺金堂は、『諸寺縁起集』によると、半丈六の中尊と金銀立像が安置されていた。ただし、これらの具体的な配置についてはわからない。穴太廃寺、夏見廃寺については仏像に関する資料がない。

時代も下り、平面も異なるが、建物、仏像両者とも現存する法隆寺金堂、唐招提寺金堂、平等院鳳凰堂で仏像と建物の関係をみてみよう。建物断面図に仏像の姿図を重ね合わせたものを作成した（図22）。法隆寺の釈迦像は聖徳太子と等身と伝えられ、他の二者よりは小さい。唐招提寺および平等院は丈六仏である。三者とも建物中

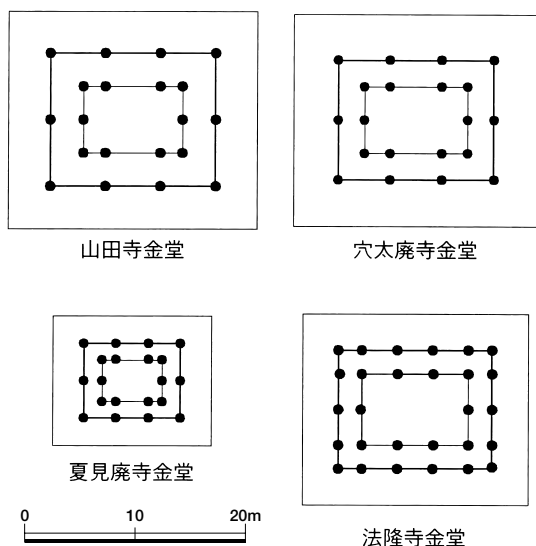


図20 山田寺金堂他平面図

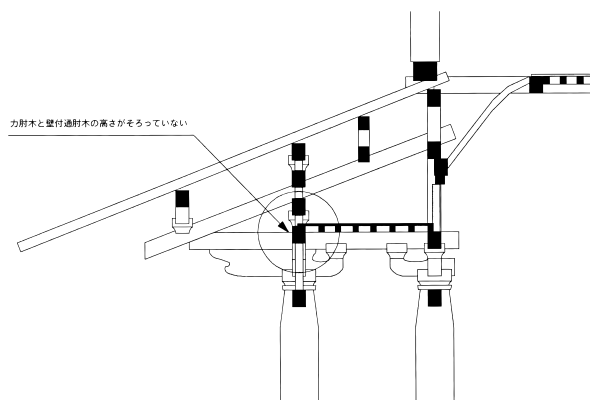


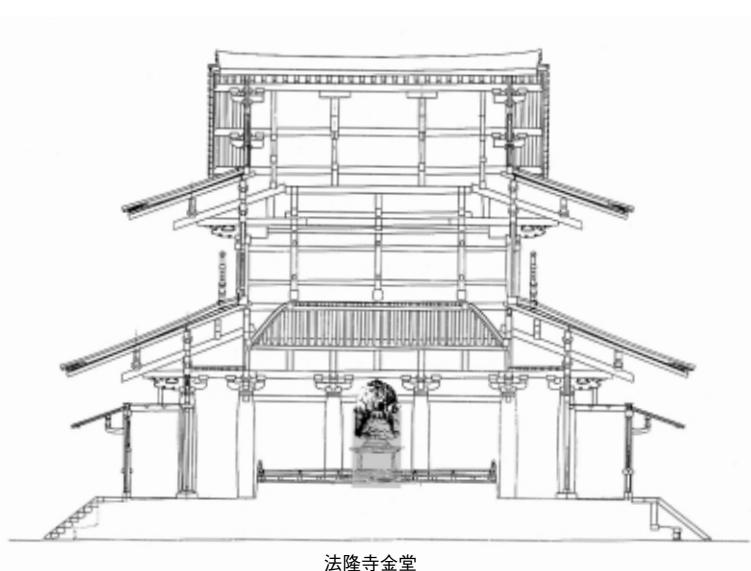
図21 法隆寺金堂組物断面図

中央間の開口幅（扉を開けたときの明く間幅。図面の網のかかった部分）は安置仏の光背や台座の幅とそろっている。これを偶然の一致とするより、意識的にこのようにしたと考えるとよいだろう。釈迦三尊像や阿弥陀三尊像のように複数の仏像をセットで安置する場合もそれに相応しい柱間を設定したのであろうことは想像に難くない。

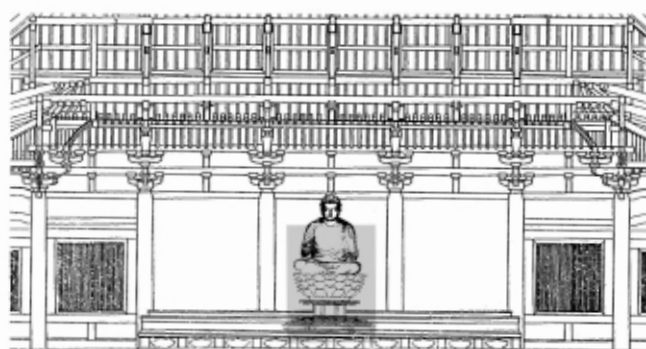
各建物の中央間は、法隆寺金堂が約3.2m、唐招提寺金堂が約4.8m、平等院鳳凰堂が約4.2mである。建物は残っていないが、丈六仏を安置していた薬師寺金堂は約3.8mである。

山田寺金堂、穴太廃寺金堂では、正面中央間はともに約5mで、丈六仏を安置する奈良時代金堂のものに匹敵する広さである。小型の夏見廃寺金堂は約3mで、法隆寺金堂とほぼ等しい。

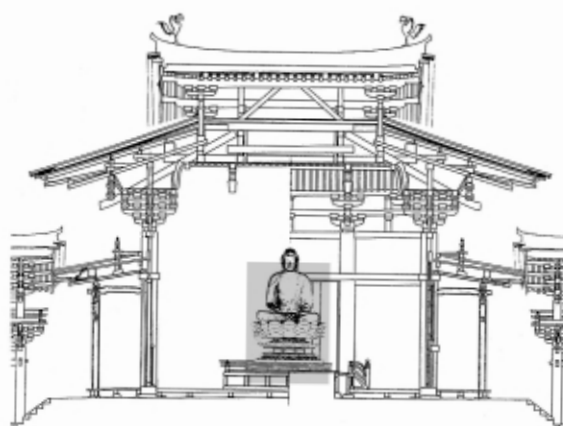
このようにみていくと、山田寺金堂式の特異な柱配置は、安置仏の形態、大きさ、配置等の要因から考え出された可能性が高いのではないだろうか。当時の組物は身舎の柱と廂の柱を一对一で結ぶ形式であり、それに対応するためにこのような特異な柱配置になったのだろう。



法隆寺金堂



唐招提寺金堂



平等院鳳凰堂

図22 金堂桁行断面図+仏像姿図

山田寺金堂と法隆寺金堂の平面は、見た目にはまったく異なったものにみえる。しかし、構造的には同じ系統で、安置仏の違いによって最終的な柱配置が異なっただけ、という解釈も可能である。

まとめ 山田寺金堂式平面をもつ建物の上部構造は、法隆寺金堂と同じでよいだろう。この特異な平面を生み出した要因について、従来構造的側面で論じられてきたが、安置仏の種類、大きさ、配置等が主たる要因である可能性が大きいことを指摘した。今後、これまであまり検討されてこなかった安置仏と建物の平面や構造との関連性をより深く追究する必要性を感じる。 (村田健一)